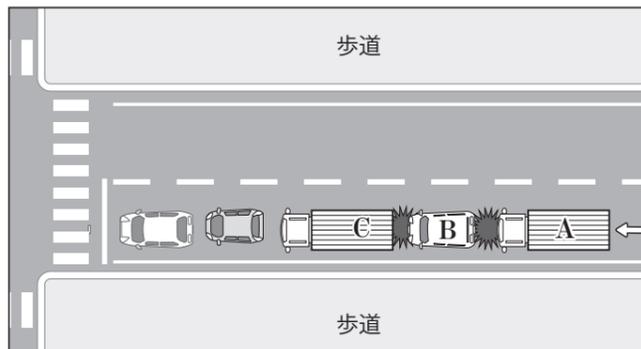


職場における交通安全指導

Part 109

渋滞中の車に、大型トラックが玉突き追突



本年6月3日現在で、対人事故は81件発生し、前年度と比べ20件の増加となっております。
また被害者数は、110人で前年度と比べ41人の増加となっております。
運転中は、安全確認を徹底され、追突事故防止に十分な留意をお願いいたします。

■事故の概要

●発生日時

日 時：平成26年4月某日 午後1時頃
天 候：曇天

●道路状況

片側一車線の直線道路（県道）

●事故の当事者

運転者A（大型貨物車）：50歳、男性
被害者B（軽貨物車）：55歳、男性
被害者C（大型貨物車）：45歳、男性

●被害状況

A：前部バンパー凹損（物損のみ）
B：重傷（両足複雑骨折）
後遺障害（下半身不随）
C：後部バンパー凹損、ボディ後部凹損（物損のみ）

事故状況

現在の運送会社に勤務して20年目のAは、大型トラックの乗務経験は25年になる事故歴のない模範的なドライバーである。事故発生の日は、横浜市内から福島県の食品製造会社へ食品の原

料を運搬中であった。

配送先到着予定時間が午後2時であり、その時間に遅れないように余裕を持って午前9時に会社を出発し、首都高から東北自動車道に乗換え、渋滞もなくスムーズであったため、予定時刻より1時間程早く納品先の近くに到着していた。

ここまでスムーズに走行してきたAであったが、この付近で自然渋滞に陥りノロノロ走行の状態となった。時間に余裕があったため特に焦りもなく、ノロノロ走行と停止を繰り返しながら走行し、「朝、出がけに妻と子供の大学進学のことので口喧嘩をした」ことを思い出し、そのことが気になったまま運転を続けた。ふと前方を見ると、走行していると思った前方Cの大型トラックが停止しており、「危ない」と思い急ブレーキを踏んだが間に合わず「ガシャン」と追突してしまった。

「しまった」と思いながら前を見ると、大型トラックのアルミパネル後部扉が以外にも離れて見え、「ショックの割に壊れが少ない」と思いながら、自車から降りて前方に向かうと、自車と相手の大型トラックの間に前後が潰れたBの軽トラックが挟まっており、運転者の男性が運転席に閉じ込め

られていた。

Aは、急いで119番し、救急車とレスキュー隊が到着して、救助されたBが救急搬送された。

事故の原因

現場道路は、地方の片側一車線直線の県道で、自然渋滞のノロノロ走行状態であった。

運転者Aの心理的要因としては、事故現場付近までスムーズに走行してきて、納品先の付近におり、到着予定時間まで1時間あるのでノロノロでも「充分間に合うから大丈夫」と気を許し、朝、出がけの際、妻と口喧嘩したことを思い出して、運転に集中できずに考え事による漫然運転状態で走行し、前車の停車に気が付いて急ブレーキを踏んだが、間に合わず追突した。

安全指導

今回のケースは、トラックの事故で最も多い追突事故です。

追突事故の原因となる心理的要因を考察することとします。

① 「急ぎ」や「焦り」が招く追突

急いだ気持ちで運転したり、約束の時間に間に合わなければという「急ぎ」や「焦り」の気持ちがでると追突事故を起こす可能性が高くなります。

② 「思い込み」や「判断ミス」が招く追突

左折の前車に追従中、「このまま左折していこう」と思い込んで、漫然と追従し、進行したため、横断歩行者を認め渡らせるために停止した前車に間に合わず追突しやすくなります。

③ 「慣れ」「油断」が招く追突

ザーザー振りの雨天時や降雪時に「これくらいなら大丈夫だろう」との油断や慣れから普段と同じ調子（つもり）で、ブレーキを踏むと、予測よ

り停止距離が長くなり、前車に追突する危険が多くなります。

④ 「漫然運転」が招く追突

交通量の少ない郊外の運転や長時間高速道路での単調な運転などで、変化がほとんどない場合など、ぼんやり（覚低走行）して、漫然運転に陥り追突することがあります。

心理的要因以外にも直接的な原因の、

- ・前方不注視（車外及び車内（含む携帯電話）への脇見）
 - ・止まれる距離との過信による車間距離不足
 - ・慌てたことによるブレーキとアクセルの踏み間違いの操作ミス
- などによる追突原因も幾つかあります。

追突事故を防止する策としては、運転中は声を出して、直接自分の脳に訴える方法です。脳は、目から得た情報を判断して整理・伝達することよりも、声による耳からの情報の方がより早く、また、漫然に陥いらずに正確に伝わると言われています。

そこで、近年、イギリス等で注目され、我が国でも国交省が推進している、コメンタリー運転の推奨です。目から得た情報を声に出し呼称（コメント）しながら判断する方法、「左前方に自転車を認めた場合、『左』『自転車』『停止』、安全確認できたら『よし』と呼称する」などの方法が最適です。

